



野蛮人のネクタイ

石原慎太郎

野蛮人のネクタイ

石原慎太郎

読売新聞社

野蠻人のネクタイ

昭和四十三年七月一日 第一刷

昭和四十三年八月十五日 第二刷

著者 石原慎太郎

発行者 鈴木敏夫

発行所 読売新聞社

東京都中央区銀座西三の一

大阪市北区野崎町七七

北九州市小倉区中津口七三の二五

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 協和製本株式会社

定価 四二〇円

野蠻人のネクタイ

—彼らにシャツやネクタイを強^しいはいけません。野蠻人は裸で幸^{しあわ}せなのです。そんなことをしたら、彼らは死んでしまいます。

フーンネス夫人 (My Africa) —

装
丁·
司
修

试读结束：需要全本请在线购买：www.ertongbo.com

変な日

狂い咲き、つてのがあるだろう。その日が、そんなだったんだよ。特に午後からがね。

もうじき四月だというのに、二日前には箱根や日光じや大雪が降ってき、東京でも、やな風が吹いて、手荒く寒かった。ニューヨークでも昨日は大雪だった。宇宙中継のヘヴィ級のタイトルマッチのアナウンサーがそう言ってたよ。クレイは勝ったな。あいつは強いって感じより、とにかくイカスな。黒ん坊で、あんなにイカス奴あいない。ジャズをやる黒ん坊なんかと違って、本当に強いしな。それになんたって、サマになってるってことだよ。あのフォームさ。あれあモノホンだ、本ものだよ。誰かが、奴は強すぎてリングで巫山戯てるっていったけど、嘘だ。奴は本気だよ。あの、猫をじゃらすみたいなフォームだつて、本ものだよ。本もののスタイルをもってる奴は、ほんとにイカスな。

あの日な、朝は寒かったけど、午後から急に陽気が変わってね。俺、海の側に住んでて、船やつてるからわかる

んだ。南の風が吹いて来てた。それも、春一番二番てのじゃなし、もわあつとした、暖かい奴なんだ。吹いて来るってより、押し寄せて来るって感じのね。どんな気まぐれか知らないけど、全く、あてにならない天気だよ。

そこで俺は、こんな陽気に何をしたら一番いいか、仲間相談もちかけようと、電話した。電話したらスミも西条もキザもスキーにいらっていなかった。あいつら俺に断りもなしにスキーにいきやがって。

尤も、誘われても俺がいけないのは知ってるからな。去年の夏、海岸で合気道の真似をして腕を折ったんだ。手をつかずに滑れるほど、スキーに情熱はかけちゃいな

いんだ、俺は。

この陽気で、春山では雪崩が起るかも知れない、とテレビで言っていた。あいつらの頭の上で雪崩でもおきるという。尤も、雪崩でもあいつらだけは、波乗りみたいにその上に乗っかって生きて帰っちゃ来るがね。そんな奴らなんだよ、連中は。俺だって、参ったなっていうくらい、要領がいいんだから。

で俺は、最後の切り札で、ヒシの家へ電話したんだ。誘や必ず出て来るけど声がかかんきや、ひねもす家にいるタイプなんだから、奴は。

それにその日は金曜日だったし、奴は間違いない家に

いる筈だ。なにしろ、金曜といや、弟子の来る日なんだ。彼の、お弟子だよ。

お弟子だったって、学問のじゃない。家庭教師なんて出来る奴じゃない。学校は違うけれど、あいつの学力にはこの俺だって、流石に舌を巻くくらいなんだからな。それでも、家庭教師もとらずに、今までダブリなしに来てるんだからな。

あいつの手芸と盆栽が凄いな。どう凄いつて、とにかく大した商売になるんだからな。盆栽は三四年前に死んだお祖父さんに教えられたのと、手芸は、鎌倉彫りつてのがあるだろう。木だけじゃなし、竹だの鉄だのプラスチックだの使った、あれの独得な奴と、それから貝だの花だの石ころだの虫だの、一つ十円もしないようなしろものにプラスチックをまぶして、釘とかブローチだとか、文鎮とか指輪とか、いろんなものを作るのさ。そりゃあ奇麗なものなんだ。

いつかなんか、藤棚についてた青い毛虫をプラスチックに埋めてミイラにした帯どめを、鎌倉であった展示会に出したら、見物に来た観光団のアメリカ人の婆あが五十ドルで買ったんだよ。ブローチにするんだとき。

毛虫の胸飾りたあ、ひでえ趣味だよな。許せないね。

買った婆さんは、丁度その場にいたヒシがそれを作ったと聞いたら、えらくたまげたそうだ。

「あの婆あがロックフェラー夫人かなんかだったら、俺、アメリカで大金持になったかも知れない」

とヒシは言った。

手芸でも盆栽の方でも、そのことで彼の家へ出入りする人間は、彼のことを先生と呼ぶんだからな。あいつは平気で、うんとかはいとか返事しやがる。お弟子の中には、年頃の、一寸いける子が何人かいるんだよ。全く驚いた眺めだよ。日頃のヒシを御存知申し上げる身にとってはさ。

だからあいつは、死んだ祖父さんの別荘だった、今住んでいる材木座の家の離れに、自分の仕事場を持っていくんだ。仕事場と言わず、工房、といつてんだがね。

いい奴だけど、全く変った奴なんだよ。変な風に、徹底してるところがあるんだ。やたらに気が強かったり、弱かったり、それだけじゃなし、とんでもないところで、抜けてる。この年になって車で東京まで出たけれど、渋谷から新宿へどういっていいかわからずに迷っちゃったり。彼は東京が嫌いなんだよ。だから必要な場所のことしか知らないっていつてるけど本当なんだ。

けてひっかける時なんぞ抜群の速き強引きでさ、その後
も大破廉恥大会かと思うと、どっか仲間の家でのティー
パで、奴に言わせるとまともでかたぎの女の子に、街に
いるナオンとどんだけ違うかわかりゃしないけど、紹介
されると馬鹿みてえに固くなりやがって、御交際なさっ
ても皇太子みたいに一ヶ月たっても手も握れねえのさ。

奴に言わせると、『悪事はなせど非道はせず』だって。
聞いた台詞だぜ、まったく。

鎌倉のボーリング場で、他所から来てた六人連れの工
員とトラブった時、折衝を一人で買って出、両方一人と
一人の刃物沙汰の喧嘩で片をつけようなんて言い出して
奴らのどぎも抜いてバアにしたかと思うと、スピード
違反で免許に停止くった俺が警察の講習受けにいくのを
車で送って来て、警察が違反者に脅しをかけるために見
せる、「悲しみをこえて」とか何とかいう、題名とはて
んで中味の違う、大惨虐の事故の記録映画を一緒に見
て、誰よりも真っ先に悲鳴を挙げて机に顔を伏せちまっ
たり。全く警察も、あいつみたいにな奴が相手だと、講習
も役にはたつだらうけどな。

なんだって、映画のショックで帰り道ろくな運転も出
来なくなつて、交叉点に来ちゃノックしてエンストばか
りしてゐるんだから。仕舞いに無免許の俺が代って運転し

て帰つたよ。

そんな奴なんだよ、だいたい、ヒシッて奴は。

ヒシッてのは勿論あだ名なんだ。それも、本名のあだ
名はヒシガタっていうんだけれど、長いからそうしたの
と、本人が是非ヒシだけにしてくれと頼んでね。

だってな、痛烈なんだよ、ヒシガタつてのは。顔の恰
好だけじゃなし、体つきや、手ぶり歩き形、鼻の形まで
全部ヒシガタの感じなんだよ。真四角じゃなし、長め
で、角ばつてゐるんだ。

あだ名をつけたのは俺たちがクルーをしているヨット
の持ち主の笠置さんだけど、この出鱈目な小説家のこと
は後でいつか話すよ。いい気なもんで、名前をもじつて
カタギつてあだ名で呼んでくれなんていつてるけど、誰
もそんなこと言わない。仲間たちは薩じゃ893号で言
つてる。船のセールナンバーじゃないよ。ヤクザつてこ
とさ。

でもものを書くせいとか、893号が奴につけたあだ名
は旨い。簡にして要を得てら。あんたらが、そのあだ名
を知つて、当人には初めて街ん中で会つたとしても、
あゝ、こいつがそうだってすぐにわかるよ。

本名は、大前順之介。四男だけど、お祖父さんの名を
もらつたんだ。この祖父さんてのが大物なんだぜ。もう

せんに科学技術院で奴の総裁をしてた工学博士でさ、若死にした親父も、上の兄貴もみんな学者で博士なのに奴だけが手芸と盆栽の先生さ。兄弟みんな顔はよく似てるのにな。

お前みたいのを科学的にいうと、突然変異か劣性遺伝でいうんだって893号はいつてたけど。その、同じ名前をくれた祖父さんのためにも、ヒシガタなんて呼ばれたくないんだそうだ、奴は。

ところがだ、ヒシの奴、家にいやがらないんだよ。

女中の後、おふくろさんが出て来て、「順は学校へ参りました」だつてさ。たまげたね。年がら年中、奴が学校へ出かけてったなんて聞いたことないのに。それに春休みの最中にだぜ。陽気で頭へ来たのかね、それとも学校から呼び出しでもかかったとしたら、いい報せじゃやいだろう。

「なにかあったんですか」

「いいえべつに。ただ学校へいくとそう申しまして」

おふくろさんはすまなそうにいうんだ。その声が実にいい声なんだな。ヒシのどこへ電話かけておふくろが出る度にそう思う。ちょっとかすれた柔かい実がいい声なんだ。声も、ものをいう感じもね。

酸いも甘いも、あなたたちのやっていることは、お母さんは全部知っているのよ、って感じの、一寸ほろっとさせるような、電話向きのいい声なんだよ。だけど実際は違うんだ。ヒシが家の外で何しているか何も知りやしない。その時だって、奴が本当に学校へ出かけていったと信じてたに違いない。息子のいうことは天使みたいに、なんでも頭から信じちゃうんだ、なにしろ上三人は学者だからな。声だけじゃなし、すべて凄くいい感じの人なんだよ、丁寧でやさしくって。彼女に比べりゃ、俺のおふくろなんて、知らん顔してながらすげえ眼はしがきいてさ、アングルの課長みてえだよ。

「今頃学校だなんて、おかしいなあ」

俺が思わずいうと、

「今村さんには何も御連絡しなかったんですね。申し訳ありません」

本気で恐縮されて、これには痛み入ったね。

奴のおふくろも、俺たちがいつもつるんで歩いてるのは知ってるんだ、何してるかは別にしても。俺が車で迎えにいったりすると、「いつもお世話さま」って丁寧な御挨拶さ。これには参るんだな。

俺が落第して同学年になったけど、ヒシはいつも俺を目上たてて、それでいて俺たちは気が合うんだ。奴に

して見りゃ五つ上だけどもういっぱしの学者の下の兄貴より、俺の方が気心通じやすいのは当り前さ。だから、奴はいつも俺からの連絡に待機してるんだが。

しかたなし海岸へいって見たけど鎌倉にも逗子にも、誰もいなかった。逗子の浜じゃ、ビーチパラソルをたてて寝っ転がったアベックのわざとすぐ側で、高校の応援部の奴らが厭味に気合いのかけっくらをしていた。パラソルの中味がどんなだかよく見なかったけど、あれで女が奴らを見てうっとりするとでも思ってるんだらうかね。

材木座の飯島の波打際で、トランクに入れといたスライドボードを出して乗って見たが久しぶりであまり旨くいかない。水もまだ冷たかったし、やっぱりあれをやるにはショーツじゃなきゃ具合が悪い。これで止めようと最後に滑った時一番旨く乗れて、三度つづけて四度目にスピードつけすぎたら踏み外して尻もちついてびしょ／＼さ。笑い声をするから見たら、生村たけしが申し訳ねえみたいになチンケな女が三人立って見てやがる。うんざりしたね。なんだか、やな予感がして来たから板をひろって家に帰っちゃった。

ズボンをはき換えたらヒシから電話がかかって来たん

だ。

「ゲンちゃん、何してんですか」

俺が材木座で転んだのを見てたみたいに奴はいいやがる。

「俺はお前を捜してたんだぞ」

「それどこじゃないですよ」

これが奴の話し方さ。

「今日は、東京、面白いですよ」

「春休みの学校で大学祭でもやってるのか」

関係なしに、

「出て来ませんか。急にこの馬鹿陽気でしょ、若い奴らがみんな浮いて出て来ちゃってね、街にどん／＼人がふえてんの。今日は絶対いいことある。舞台は今やスキー場からふたたび東京に戻りましたよ」

その後、奴は突然、とんでもなく大きな声で笑い出した。後から誰かにくすぐられたみたいだ。

「誰かそこにいるのか」

「いませんよ。ゲンちゃんを待ってますよ。それから、今日は車あった方がいいと思うな、いろいろと」

「俺に運転して来いって訳か」

頓着せず、

「いいこともありますよ。それにね、オルテガに聞いた

話じゃ、今夜、どこかで凄いパーティーがあるそうですよ。コレモンの、大乱痴気。誰がどこでやるのかまだわかんないけど、いろんな奴が同じ噂を聞いてるらしい。情報ルートを当って、捜しときますよ」

「オルテガと会ったのか」

「え、一緒にいるんです。奴は今一寸その喫茶店へリサーチにいきました。こんな時間なのに、結構なナオンがわん／＼いるんです。この分で夜になりや、凄いと
思いますよ。熱海じゃ桜が満開になっちゃったし、奴らも花と同じですよ。もう、てんで浮いちゃってんの」

ヒシの奴は自分一人は別みたいにいった。

「その、パーティーってのは何なんだ。またどうせスカシ
だろ」

「ところがそうじゃないんだって。みんな聞いて知ってるけど、誰も正体がかめないんですよ。知っててどばける奴もいるかも知らないけど。あることは確かです。まだ幻だけ」

「よし、俺のいくまでにそのマボロシの当りをつけとけ。車は転がしていく。四時半頃、キクカワの店の前に
いくよ」

「待ってますよ。今日は絶対に、なんらかの実入りがありますから」

電話を切った後、すぐに俺は反省し、後悔したな。こんな日はどっちかっていうと、何かスポーツでもした方が日よりに合ってるんだ。それに、ヒシの連絡を鵜呑みにしたのは、軽卒だった。あいつの情報はいつでもどこか誇張があって、正確じゃない。

たとえばあいつは、去年夏、海で潜っていた時、二尺くらいのハタを見て仰天し、水の中で「鱈だ」と叫んでマウスピースを吐き出してしまひ溺れそうになり、ろくに息も吐かずに十米の下から急上昇して来てもう少しで潜水症にかかりそうになった。

この陽気で、東京の街に起っている特異現象を彼がどんなぐあいに報告して来ても、もう少し、冷静に聞きとるべきだったかも知れない。

しかし、それとは別に、確かに、そんな日が一年に僅か何日かあるものなんだ。曜日や季節に関係なく、一日、いや午後から夜中までの半日だけ、街の様子が狂っちまう日がな。

今日がそれだとしても確かにおかしくない、と、俺は部屋の開け放した南向きの窓で風になぶられてるカーテンを眺めながら思った。たしかに部屋の中まで忍び込んで来る風の肌触りは、素っ裸の女がこちらも裸の胸へもたれかかって来るみたいな感じじゃあつた。

女党員

考えてみたらヒシがオルテガといるんじや、俺おれを入れて三人に、それぞれ相手が見つかったらワーゲンじやちっちゃすぎるから、西条の家に電話して、奴やつは留守だけれど奴のシェビイを借りることにした。六二年ものだけど赤いコンバーチブルで、あの日の陽気にはもってこの車くるまだからな。

西条がいたら、勿論もちろん乗って来たろうけど。奴は手前で手前のことを獣人けうじんでいってるんだ。女ならなんでもいって奴やつき。自分で勝負していけば、けっこういいところの出来そうなタイプなんだけど、こいつがまたてんで面倒臭めんどくさいがりだね、暇ひまがありや何かスポーツやって、その後俺たちとこへ来ちゃ、「ゲンちゃん何か出ものはない」なんて訊ききやがる。

「僕おれはどうも、自らすすんでは、ナンバは出来ないんですよ」

なんていってやがる。

それでいて、いつも俺を見る度、

「あゝ勝負したい、勝負したい。誰たれかいませんか」って。俺はサンタクロースじゃないよ、全く。

去年の春休み、葉山のスミの家に泊りこみで麻雀マージャンやってた時、奴と同じ草野球仲間のガツたちが横須賀へ飲みに行った帰り終電もとつくになくなった湘南田浦の駅の前に一人でたつた変な女に声かけて拾って来てね、葉山の安いホテルに連れてってピッチャーのガツとキャッチの武ちゃんたけちゃんがやったんだ。その後、友情の発露はつろって奴で西条を捜して、スミの家へやって来て、女のことを話した。西条の奴、前のイーチャンでひどく沈んで頭かぶへ来て一睡ひとねりしようとしてたところだったけど。

その話聞いて飛び起き、スミから借りたバジャマのまゝで、ゴム草履くさぢつかけてそのホテルまで走っていったんだ。ガツの話じゃ、女は田浦の自衛隊にいる男に会いに来たとかで、男に会えたのか会えなかったのか知らないが、水向けたらすぐに乗って来て、若いけどそりゃスキな女おんなだったって。

「俺たち二人でもまかないきんねえから、西条がいけば仕上るだろうな」

ガツがいった。

ガツがいった通り、西条の奴、ネバリにネバってハッスルし、そのまゝ次の日の昼すぎまでホテルにいてさ、

女と別れた後バジャマのまゝ歩いて帰って来やがった。

まだぼうっとした顔つきで、

「あゝ夢じゃねえかな」だって。

いろんな奴がいるんだよ、俺の周りには。その内、おい／＼もっとわかるけどさ。

で俺は西条のシェビイを転がして東京へいった。転がるなんてしろものじゃねえんだ、この車が。マフラーがぶっ飛んで、調子の出ねえジェット機みたいな音をたてやがんのさ。なにしろエンジンはV8だからな。まずこのまゝじゃ車検は通りっこない。それに、ボディが赤だろ、こいつでハイウエイを走っていると必ず後から白バイかバトカーが尾いて来る。ポリには癩の種、ある種の女の子にはシンデレラの馬車とはいかなくても、隣りのシートが空いてたら乗って見たいと思わせるような車さ。

俺は幌を下して春姿で走り出した。陽気が陽気だし、こうやって走ってりゃ、東京までの道中になにがあるかもわからないしね。

途中でフロントガラスの油のしみが気になって窓拭きを捜しにシートとシートの間へ手を入れたら、セーム皮にくるまって、女のレース柄の黒いストッキングが片っ

方出て来たよ。

ほかにまだまだ何かありそうなんで、ダッシュボードを開いてみたら、まいったね、鼻の欠けた男の顔が飾りについている海泡石のパイプとパイプタバコの空罐、それに奴のMサポーター、どういう訳だか後半分のとれた週刊誌とそれにはさまったエロ写真が五六枚。そしてます／＼まいったね、カフスカタイピンを入れるピロッド張りの小箱が最後に出て来たんで開けて見たら、何が出て来たと思う、一度使ったサクキ。それも後で洗ったんだろうな、裏返しにして適当に巻いて畳んであるんだ。多分どこか不自由なところで、何かで、急いで次の需要にせまられたんだろうがね。

俺は驚いて、捨てるよりも手近な元のダッシュボードの中へそいつを叩き込んだ。

それに、Mサポーターというのはどういう魂胆だ。奴は何か運動していた最中にある小箱の中味を使うことになったとでもいうのかね。

パイプと空罐も収めた後、残った写真を一枚ずつ拝見した。二枚はキャビネサイズの引き伸ばした複写で、こいつは大学の写真科にいってる滝本の仕事だ。残りの四枚の手札より、でかい方の写真がずつといい。

手札の方は日本人の女同士で、全然作りごとめいて

る。組み合わせは、オールドミスの高校の教師と女子大生って感じだけど、若い方の女はどっかで見たことあるような顔をした。年上の女は眼鏡をかけている。驚いたね、眼鏡をだぜ、素っ裸になって股あ開いてるってのになあ。タキにいわせりゃ、こういうのもリヤリズムってのかも知らねえよ。

キャビネの方の毛唐はよかった。特に女の方がね。男の顔は後半分しか見えない。女が、たまらん顔をしてやがるんだ。それにアングルがいいのさ、すべての角度がなにもかも実によくわかるように撮れてる。

スピードを落しながら手にとり直し眺めたね。運転にはよくないよ。しかし、あんな写真を見ると、人ごとじゃねえって感じがして来るよな。こうはしてられないって気がな。

とにかく西条の、ダッシュボードの中のコレクションはいろいろ他人の想像力を刺激してくれるよ。

コースはバイパスから第三京浜へ入った。港北のゲイトをすぎて半分くらいいった時、先の待避ゾーンに入ってたブルーボードの側に立ってた女の子が俺に向かって手を振って来た。

減速しながら通りすぎようとした俺にもう一人の女が

両手を挙げて叫んだ。俺は仕様なしに止った。後から来てた中型トラックの運ちゃんがお呼びじゃなかったって顔で、いま／＼しそうに俺を睨みつけながら追い越していった。

少しバックして、

「呼んだのは俺かい」

いいながら相手を見た。二人とも並以上だ、それにどこかで見たことがあるような気がしたんだ。そういや、この頃の女ってどれもどこかで見たことがあるような気がするよな。日本が狭くなったのか、それとも、つまり個性の問題かね。

二人とも短いスカートをはいて、白いブーツをはいてよ。了解に苦しむんだな、わざ／＼上まで見せたものを見ていた。俺も同じように見返してやった。大事な瞬間なんだよな、これが。

二人はうなずいて、その後一寸の間黙って俺を見つめていた。俺も同じように見返してやった。大事な瞬間なんだよな、これが。

80点と86点と俺はつけた。二人の内じゃ、左側の、水色のニットを着ている方の子がよかった。

二人は互いに顔を見合わせ、くす／＼と笑い合った。女の子がどんな時にそんな風にやるかわかるだろう。

奴らにすりゃ、呼びとめた俺が意外にイカシテたの

さ。俺は尚黙ったまゝ、渋く、煙草をとり出して火をつけた。

「あのね。車が変になっちまったの。すみませんが、見てくれない」

「わかるかしら」

相手がドチンケなら、「そこにある非常用電話でどこかの修理屋を呼びな」って走り去る訳だが、俺は時計を見直し、肩をすくめながらエンジンのキイを切った。まだ時間はある。今日のためでないにしても、この二人にあたりをつけたいといい。

二人は天井のない俺の車のシートに他に誰かいないかをもう一度確かめるみたいにそっと中を覗き込んだ。相手に、ある種の期待があったことは間違いないね。

そこで扉を開いて下りたった俺が、六尺近い背丈ならもっとイカスんだが、惜しいかな、俺は背が低いんだな、天は二物を与えずだよ、全く。

「動くことは動くんだけど、アクセル踏んでも、ギヤを換えてものろ／＼しか走んないのよ、さっき、急にそうなったの」

80点の方がいった。

フロアチェンジのブルーバードスポーツは、マフラーが切っており、ふかすと結構一人前のうなり声をたて

る。

ギヤを入れ動かして見るとすぐにわかった。

「この車でよく、滅茶飛ばしたり、定員以上乗ったりするだろう」

「よくわかるわね」

「だからだよ、クラッチがすべっちゃってる。修理屋に入れて、クラッチ板をとり換えなきゃ直らねえな」

「それ以上ぜん／＼無理？」

「無理だね。置いといて、レッカーを呼ぶよりない」

「困ったわ」

「電話して、キイかって置いとくときゃいいじゃねえか。キイは後から修理屋にとどけりゃいい。君らどこまでいくんだ」

「渋谷よ」

「なら、途中まで乗っけていってやるよ」

二人は顔を見合わせ、肩をすくめた後頷いた。86点の方が、非常電話をかけにいつている間に、80点が車の中から持ちものをとり出し、ドアに鍵をかけた。

その時になって車のリアウインドに変なスティッカーが張ってあるのに気づいた。

アルファベットのでっかいDの中に、骸骨が描いてある。よく見ると、彼女が持っているハンドバッグの蓋に

も同じ柄の小さなバッジがついてるんだ。

「その、Dに骸骨はなんのしるしなんだい」

「ああ、これ」

80点は、ちょっと照れたみたいに微笑い、その後、
気負った風に微笑い直す、

「デインジャー党よ」

「デインジャー党？」

「知らないの？」

彼女はちょっと傷ついたみたいに見返したが、自分の
立場がそれほど強いものじゃないことを悟り直したよう
だ。

知らないことはない。時々週刊誌なんかに出てる。横
浜の遊び人ども、と手前らでは称してゐるらしいが、その
グループの名前さ。

東京じゃ六本木や原宿、そのほかどこそこ、それぞ
れナントカ会だのナントカ党だのいうのがあって、互い
に相手を百姓呼ばわりしてシノギをけずってんだそうだ
けどデインジャー党は横浜で名乗り挙げて、東京の野郎
どもはみんなヒャクだつてイキがってんだそうさ。

ヤクザチンピラが鳴りをひそめりや、今度はカタギの
若い衆がソシキを作るって訳だ。好きだね、全く。それ
も、党と来るんだから、怖れ入るよ。それがまた、全部

互いに仲が悪いつてんだから、爺いどものやうなこと
に変わらねえよな。

「女の黨員もいるのかね」

俺が訊くと、80点は少し気をよくしたみたいで、右
肩をいからすみたいにして、「そうよ、と言った。

「女は何人くらいいるんだ」

「けっこういるわよ」

「君らが、女の方のバンチョウカ」

「幹部ね」

と来たね。

86点が電話して戻つて来た。

「カッで電話したわ。OKよ」

カッというのが、党首のことかどうかは訊かなか
つた。だけど、この86点組が揃つてるのなら、デインジャ
ー党の女子執行部の存在は記憶にとめておいてもいい。
86点を真ん中にして二人はフロントシートに坐つ
た。俺が尋ねる前に、二人は名乗りを挙げた。80点が
富江、トミ、86点が、アキ子、アキ、ってんだそうさ。
俺も名乗つたよ。

車が走り出すと、

「今日はいい天気ね」

86点のアキがいった。平凡だね、わりと。

「君ら、女党员は、いつも男の党员と一緒に行動するの
かね」

訊くと、

「そんなことないわよ」

トミはまた肩をそびやかした。

「すると、他の奴らと遊んでもかまわねえ訳だ」

「あたり前よ。でも、敵はだめよ」

「敵ってのは」

「雑誌に書いてあるでしょ」

ジャーナリズムを意識しとるんだな、全然。たいした
ものさ。

「それで、いったいなににそんなにデインジャーがある
んだね」

「危険はそこら中にあるわ。それを求めて踏み越えるの
よ」

80点は党の綱領を暗誦するよう^{あんじよ}にいった。ひよっと
するとこいつは党首の情婦かも知れない、と思った。

「哲学的なんだな。つまり」

「行動の哲学よ」

と来たね。

「じゃあ、具体的にいって、危険てのはどんなことか
ね」

「あんただって危険だわ」

80点が気の利いた冗談^{じやんたん}のつもりでか、また肩をそび
やかしていった。

冗談じゃねえ、この女は少しショッてるよ。俺は85
点以上じゃなきゃ関心をもたないことにしてるんだ。

「確かに、気が変って君らをこの第三の途中で放り出
さねえとも限らないからな」

「冗談をいわないで」

「冗談はいった後で、実行したらもっと面白いぜ」

「あんたまさか、敵じゃないでしょうね」

「俺は無所属さ」

「一匹狼^{おおかみ}ね」

そう気負っちゃ何も出来ないよ。

「俺はしがなないピーチボーイの一人さ」